

殺生石エリア

「殺生石」は、茶臼岳山麓の小さな谷間にあり、その場所は、湯本温泉のちょうど上流にあたる。岩だらけの谷底に設置された木道がその周りを囲み、那須最古の温泉の源泉が地面から泡立っている。アクセスの良いこのエリアには、殺生石のほかにも文化的、歴史的に深い意味を持つ場所がいくつか存在する。

賽の河原

谷の真ん中は、賽の河原と呼ばれ、亡くなった子供たちの魂が待つ地獄の川底の名前である。日本独自の仏教の考えでは、死産、あるいは若くして亡くなった子供たちは親を悲しませた罪とされ、極楽浄土に行くための必要な功德を積む時間もなかった。そのため、子供たちは川のほとりに留まり、罪を償い、救いを求めて祈らなければならない。子供たちは石を積み上げて小さな卒塔婆をつくり功德を得ようとするが、鬼が毎晩それを崩しにやってくる。幸いなことに、子供たちには守護者がいる。それは、旅人と子供を守ってくれる地蔵菩薩である。地蔵は子供たちを慰め、裳裾の中にかくまって、賽の河原を越え子供たちを極楽浄土に連れていく。亡くなった子供たちの親族は菩薩に祈り、菩薩が愛する子供たちのために取り成してくれることを願って供物をする。

地蔵像は赤いよだれかけや帽子をかぶっていることが多い。これらは子供たちの靈魂が裸のままでないよう寄付されている。歩道に沿ってたくさんの石が積み上げられているのが見えるが、子供たちがもっと早く救われるのを願って、親族が子供たちに代わって石を積むのである。

教傳地蔵

14世紀はじめ、教傳という僧侶がおり、現在の福島県蓮華寺の住職を務めていた。ある日、教傳は友人と一緒に那須温泉に行くことにした。出発の朝、母親が教傳の旅支度をしないで朝食を作っていることに腹を立てた教傳は、母親を罵り、お膳を蹴り飛ばして出て行った。那須での滞在中、一行は殺生石を見に行くことにした。一行が賽の河原に近づくと、雷鳴が大地を揺るがし、地面から火災熱湯が噴出した。連れの友人は逃げ去ったが、母親に酷い仕打ちをしたことで天罰を受けた教傳は、火の海に落ちて亡くなった。

1720年に最初の教傳地蔵像（一番後ろ）が建てられ、その後、教傳のような親不孝をしないように願う人々が訪れ祈るようになった。1982年に新しい教傳地蔵像が建てられ、2つの小さな地蔵が隣り合っている。毎年5月下旬に教傳の追悼式が行われる。

千体地蔵

教傳地蔵の脇に新たに二対の地蔵を設置したことは、地域社会が千体地蔵を彫る取り組みの一環だった。一つ一つの像は、旅先での事故や自然災害（教傳に降りかかった災難など）に遭わないようにと願う寄進者の祈りを表している。これらの像のうち最初のものは1978年に設置された。それぞれに異なる特徴と印相があり、顔は教傳の旧寺である蓮華寺に向けられている。

湯の花採取場

湯の花は、温泉水とその蒸気のなかに鉱物の微粒子が浮遊してできたものである。温度が下がると結晶化し、天然の入浴剤として利用されている。この場所では、かつてミネラルを含んだ蒸気を閉じ込めるため、亀裂の上に草のマットが敷かれていた。蒸気が冷めると、結晶堆積物が形成された。江戸時代（1603～1867）の湯の花は貴重な商品であり、米の代わりに年貢を納める農民もいた。